

プロローグ

子どもの頃、今は亡き父と一緒に近所の縁日で飴細工を見たのは、とても楽しい思い出のひとつです。照りつけるような陽射しがやわらぐ夕刻、母に浴衣を着せてもらい、父の帰りをウキウキしながら待っていました。トンボ模様の浴衣に朱赤の兵児帯を優しく結んでもらうと、背中に蝶々がとまったみたいで、嬉しくて何度も鏡の前でくると回りました。日が沈み、父が帰る頃には、太鼓を打つような大きな音とともに夜空に花火が咲き始めていました。

私が入混みに紛れてしまわないように、父の大きな手はしっかりと私の手を包み込んでいました。神社の境内や参道にはたくさんさんの屋台がならび、心が浮き立ちます。その中でも、ふっと惹かれて立ち止まったのが飴細工の屋台でした。

熱い飴がかたちをみるみるうちに変えていくことに驚き、幼い瞳を輝かせました。あつという間にウサギや馬、龍などができていく様子に夢中になりました。鮮やかに咲く花火も、その大きな音

も目や耳にまったく入らないほどに……。

とくに、飴細工師が小鳥の飴を作っていたのは、印象的で忘れられません。このときは、どんどんかたちを変えていく飴が熱いことなど少しも知りませんでした。

深い紺色の夜空の下で、裸電球に照らされ、飴が黄金色にキラキラと煌めいていました。飴細工師が、細かくリズムカルにチヨキチヨキと握り鉄を動かすと、飴が羽のようにふわつと広がってきます。それは、子ども心にすごく不思議で、美しく、とても感動的でした。「私も飴細工、やりたい！」と小さな胸を躍らせました。あれは小学校の1年生くらいのことでした。

私は飴細工師です。歌いながら飴細工をつくるパフォーマンスで日本全国はもちろん、海外のイベントにも出演しています。

幼い瞳を輝かせたあの日から22年、まったくの独学で飴細工を始めました。阪神淡路大震災で父を亡くしたこともあり、生きているうちに自分がやりたいことをどうしてもしておきたかったのです。

原材料も必要な道具も細工の仕方もある仕事も、何もわからないところから始め、試行錯誤と大やけどを繰り返しながら習得しました。それまでやっていた仕事も何もかも辞めて、経済的なことも含め、生活のすべてを賭けて取り組めました。寝る時間以外は、餛細工が私の頭と心を覆いつくしていました。自分が納得のいく餛細工を作れるようになるまで何度も何度も練習し、餛細工を作り続け、2週間で1000個以上の餛を作りました。いつか餛細工師として海外でも活動できるようにすることを夢見て……。

そして、今は「餛細工師 minor」という女性パフォーマーとして活動を開始し、12年になります。目標だった海外での仕事もいただけるようになりました。

白地に桃色や桜色のお花をちりばめたような着物をアレンジしたミニスカートの衣装、カールしたロングヘアには大きめの薔薇の髪飾り。小さな花がゆらゆら揺れる「さがり」がお気に入りです。もともと少しエキゾチックな顔立ちなのに、さらにつけまつげとアイメイクでクッキリハッキリ子どもたちと一緒に歌を歌いながら餛細工を作る姿は、みなさんのイメージする昔ながらの縁日などの餛細工とは、かけ離れているかもしれません。口角を思いつきり上げて、笑顔でパフォーマンズしている様子はとても楽しそうで、夢が叶って幸せそうに見えるかもしれません。

しかし、「摂食障害」と「咽頭乳頭腫」というふたつの「病」を抱え、ずいぶん長い間、悩み、苦しんできました。高校3年生のときに阪神淡路大震災で父を亡くし、学業のかたわらアルバイトで生活と学費を稼ぐ貧しい学生時代。学校を卒業しても、摂食障害のために過食嘔吐が止まらず、お金も時間も浪費するばかり。

ダメな自分を責め続けて会社にも行けず、世の中に馴染めなくて引きこもりがちでした。言葉では表せないくらいにつらい思いや経験をし、自ら命を絶とうとしたこともありました。底知れない寂しさや自己嫌悪、言いようのない憂鬱と苦悩。心にとてつもなく重い荷物を抱え、ひとりで生きてきました。

人生の半分以上を、摂食障害に苦しんできました。この病気にずいぶんと振り回され、さらに喉を悪くし、泣き続けた日々もありました。しかし、受け止め方や考え方を変えれば、事実は変わらなくとも心は軽くなりました。そこから学んだことや気づいたことは数えきれないほどあり、それはかけがえのない私の「宝物」。

そして、多くの人々が同じ病に苦しみ、命を絶つたり落したりしていることに、心が痛み、こ

の上ない哀しみを感じます。この世に「生」を受けた奇跡を、摂食障害のような病で命を絶つことはあつてはならないことです。そのほかの病や障がいでも同じです。

心の病やいろいろな障がい、日々の生活の中での問題などに悩んでいる、皆様の心が少しでも軽くなるようにと願いを込めて、私の「宝物」をお伝えするため、講演や執筆活動をしています。

私にできることは少ないかもしれませんが、いつも「自分のできる精一杯」をしたいのです。すべての人々にありつたけの愛を込めて……。

私の「宝物」を受け取ってください。貴方の心がふんわりと軽くなっていれば、これ以上嬉しいことはありません。

この本を閉じるとき、きつと「人生はまだまだ素敵」だと気づいていただけますように……。

